THE JAPAN INTERIOR DESIGNERS' ASSOCIATION

JID

no. 58

1972. Nov. 1 th.　　昭和47年11月1日発行

目　次

主集　協会のNOWな情況を知る
協会員は自覚する・山岸柾史…… 1
デザインイヤーの準備状況・渡辺　優…… 2
かるてっと・職域調査アンケートほか…… 3
かるてっと・職域懇談会報告…… 5
海外レポート・榎田　均…… 8
賛助会員紹介・編集後記…… 11

協会員は自覚する

山岸柾史

最近，特にデザイナーそのものの価値についていろいろ考えさせられることが多い。何しろ名刺一枚で場合によってはデザイナーが誕生してしまうのだから，巷にデザイナーが氾濫している。何しろ，一応カッコよい職業の一つと云われているからか。しかしこの世界ほど何と冷たく特に自分自身しか存在しないということを知っているのはデザイナー自身ではないだろうか。例えば一つの商品をとっても，それがよいデザインだから売れるのか，デザインに関係せずに売れるのかその辺の因果関係についてはいろいろのケースが考えられ一概に判断出来ないが，一般消費者の立場から見た時，まだまだデザインそのものに我々デザイナーが感じている意義を知り理解してくれているであろうか。

国を動かしているのは現実の問題として政治家であることは事実である。我々デザイナーにとって政治についてはどれだけ理解しているだろうか。多分，別世界の人間に感じていると思う。政治家から見ればデザイナーは，別の世界と感じるであろう。

しかし根底に流れる我々人間の生活はあくまで一般大衆のものである。デザイナーがひとりでいくら叫ぼうが何も出来ないのは判っていることである。幸か不幸かデザイナーの殆んどは，それほど政治に対して興味をいだかず，ただひたすらにデザインすることに理想を持ち生活を送っているのではないだろうか。

しかし，人間は生活をしなければならない現実の問題がある。少なくとも自分自身でデザイン事務所を経営する人達にとっては，デザイナーと経営者との二つの面において自覚を持ち責任義務が生じてくる。一般的にデザイナーは，自己の感覚を主張することは何の抵抗もなく進められるが，こと金銭的なことになると往々にして自己の欲する所を述べない場合が多く見られる。

協会に入会し会費を払いながら，こと協会より得られる利益に関しては，なるべく無関心でスマートにカッコよく過してしまっている会員が多くはないだろうか。勿論，毎日の忙しさにわずらわしいことについて避けて通ることに，自分で道を選んでいることはないだろうか。

人間一人の力には限界がある。やはり，組織の強さにはかなわない。企業として会社組織が生れたのも，そこに利点が見られるのも一つのポイントであろう。従って我々が協会を作ったのはそこに一つの組織を形成しおたがいに利益（いろいろな有形無形の要素をもつ）を生じるためのものであったはずである。

とかく，インテリアデザイナーに於いても一匹狼の要素を多分に持ちすぎている人種ではないだろうか。それは，職業から云ってもより個性を主張しなければならないのであり，人の真似は許されないからである。それだけにより個性の強い人達の集まりだけに組織されてしまうことに反撥を感じようし，組織作りについては決して上手ではないだろう。しかし，インテリアデザイナーの地位，価値についてはいまだ認識が低いことは衆知のことである。

それがためには，組織をもって強く進まねばならないのではないだろうか。

来年度は，デザインイヤーに決まり，一応，国家的にも認識させるため大いに努力しなければならないと思う。

それには，会員全員がより多く会のため力を出し合わねばならない。人まかせの態度は，一掃されねばならない。そこに，利益が生じ分配されるのではないだろうか。

協会は，それぞれエキスパートの集まりである。日本語と英語の微妙なニュアンスは，なかなか難問であり，デザイナーという言葉も実に広い。このエキスパートという言葉も辞書によれば，専門家，老練家，熟練した人，くろうと等，解釈されている。それぞれこの道で生活し常に自信をもって仕事を進めていられるのは協会員としての各人の力であり，名実共に熟練したデザイナーであると云える。

そのデザイナーの集まりである以上，おたがいに一層強力にデザイン活動が出来る様に協力し，協会を一層強固な組織としなければならない。特に，ヤングな諸志の実際的な参加が必要ではないだろうか。

また，それに応ずべき協会の組織としては委員会により多くの人達の参加が必要ではないだろうか。

そして，委員会は，その担当すべきそれぞれの範囲では特に積極的に権威をもって行動し，理事会を大いにリードすべきである。

しかし，現実としては自分自身の仕事に追われて，ごく一部の人達のみの参加しか得られていない様な感じがしてならない。

（以下7頁につづく）

デザインイヤーの準備情況

―― デザインを通じての人々の生活の向上 ――

渡　辺　　優

わが国経済のめざましい発展は，私たちの日常生活に豊かな物質文明をもたらすとともに，さまざまな歪をおこし，「人間の生活とは」があらためて問われております。この現状に対して通産大臣の諮問機関であるデザイン奨励審議会は，昭和47年８月「70年代のデザイン振興策のあり方」について答申し，「豊かで調和のとれた国民生活のためのデザイン振興策として国民運動の展開」を強くもとめております。

私たちの今日の生活は，公害問題や都市問題などにとりまかれ，その解決は，個人の能力をはるかにこえています。とはいえ私たちはもはや物質文明の助けなしに生活していくことは不可能です。私たち自身このような生活環境の中で，秩序の感覚を見失ない，ごく身近かな環境を整えることすらおこたっているのではないでしょうか。

日本文化はかって日常生活の中に美と品格に満ちた精神文化を表現していました。それは日本人が美の感覚で自らの生活を築き上げることができる優れた資質を持っているからにほかなりません。

人の心と物を結びつけ，生活に秩序をあたえるもの，それはデザインです。つまり，あまりにも物質文明に偏した今日の日常生活に，精神文化を取りもどし，高度に発達した産業技術と私たちの生活との健康な関係を保つ手がかりはデザインにあるといえるでしょう。

この運動は，デザインそのものの母体である文化運動であるとともに，明日の生活を求める運動という性格をもっております。

この運動は，私たち一人一人が生活に対する深い理解と創造力によって参加しうる国民運動として展開される必要があるのです。

この運動は，生活と産業の新しいかたちのむすびつきを求める世界の国々の注目の中でくり広げられることになりましょう。

1973年のデザインイヤー事業は，この運動の起点として展開されますが，その成果を得るには，永い年月の集積を必要とします。そしてこの運動が，私たちにとってたしかなものとして浸透したとき，はじめてかっての文化の伝統が生きた力をもって日本の新しい姿を描くことになるでしょう。

以上は８月にデザインイヤー事業準備委員会が作文したデザインイヤー事業についての主旨である。期間は昭和48年４月１日より，翌年３月31日まで。

主催者はデザインイヤー事業運営会と通商産業省。予算規模は２億６千万円など大要がきめられた。事業は予算の縮少等の事情に合せて展示事業（全国８都市での展示会を中心とする）国際会議（世界インダストリアルデザイン会議――総会48年10月8，9日東京・会議10月11日～13日京都）広報事業，協賛事業の４つにまとめられることになった。

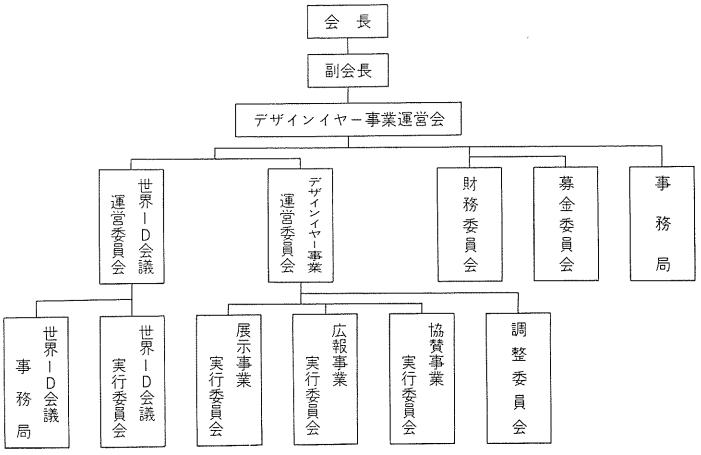
現在組織をかためる作業が進行しているが，デザインイヤー事業運営会は財界，産業界，デザイン振興機関，デザイナー団体，文化人，報道機関の代表及びデザイン奨励審議会委員等によって構成される。

現段階において，当協会としては準備委員会及びその実務グループである推進委員会に，白石理事長を中心に，渡辺デザインイヤー委員長，三宅渉外委員長等が参画しているが，組織が明確化した段階では推進委員会は解消し，実行組織の中で会員の協力の必要が生じることになる。

準備委員会の構成

東京都工業技術センター
大阪府立貿易館
愛知県産業貿易館
日本商工会議所
日本貿易振興会
日本繊維意匠センター
日本陶磁器意匠センター
日本輸出雑貨センター
日本機械デザインセンター
日本インダストリアルデザイナー協会
日本インテリアデザイナー協会
日本デザイナークラフトマン協会
日本パッケージデザイン協会
大阪デザインセンター
日本産業デザイン振興会

デザインイヤー事業運営組織(案)　47.9.7



職域アンケート調査結果について

会員相互の連けいを密にすることを主たる目的として，今年度新に“組織委員会（委員長吉永淳氏）”が組織され活動をはじめたが，最初の事業としてとりあげたのが“職域調査”であった。アンケートは正会員ならびに準会員を対照としたが，その調査結果はつぎのとおりである。

1. 調査方法　往復ハガキによって次の項目について回答を求めた。（図１）（昭47年８月実施）
2. 回答数（回答率）204通(56％)
3. 調査結果

(1) フリーデザイナー，回答数72人中の35人が兼職をもち，うち30人が教育にたずさわっている。

また兼職をもたないフリー37人中，共同経営の２人を除き単独，自営のものはそれぞれ18人・17人である。

(2) スタッフデザイナー，回答数93人中兼職をもつ人は11人で，その内訳は，教育・研究関係８名，フリー３名であった。

また，勤務先をみると百貨店の33人を筆頭として，メーカー25人，デザイン事務所14人がこれに次いでいる。全員の回答が集れば，百貨店関係者の数はさらに延びるように思われる。

(3) 教育者　回答26人中，研究者を兼ねるもの10名，行政を兼ねるもの１人，であった。

また，教科目をみると，デザイン実技とデザイン理論を合わせ担当する人が大多数を占め，建築担当数は10人，技能教養担当数は５人であって，それぞれの一科目のみを担当する人は，デザイン実技３人，デザイン理論２人建築，一般学科それぞれ１人であった。全体で一般教養担当をあげた人のは１名であった。

なお，教育にたづさわる人は，兼職者39人を合わせると計65人となる。

(4) 研究者は合計８人で，研究専門のものは５名，行政を兼ねるもの２人，教育を兼ねるもの１人であった。

勤務先をみると，国の機関２人，地方機関６名である。

(5) 行政職にたづさわる人は，国の外郭機関３人，地方機関１人，研究職としての兼務者２人（国および地方）となっている。

ほかに判別の不明の回答が１通あった。

回答率56％の不満はあるとしても，本調査は，会員の職域について，一応の傾向をつかみ得たものと思われる。

以上の明細は下記区分表のとおりであるが，これに兼務を加えた各区分別の合計数は次の計欄にみるとおりである。（○印内数字は兼職）

区　分		A	B	C	D	E	計
フ リ ー	(A)	72	④	⑥			82
スタッフ	(B)	⑤	93	③			101
教 育 職	(C)	㉚	⑦	26	①	①	65
研 究 職	(D)	②	②	⑩	8	①	23
行 政 職	(E)			①	②	4	7

あ と が き

この調査の目的をみたすために，お手数でも，未回答の方は“図１”を参考として，それぞれの該当事項をお送りいただければ幸です。

なお，調査のとりまとめは事務局が担当しました。

表１　ＪＩＤ職域調査項目案

Ⅰ □　正会員
Ⅱ □　準会員

1.（職能区分）

A．□　フリーデザイナー
B．□　スタッフデザイナー
C．□　教育者
D．□　研究者
E．□　行政職
F．□　学生
G．□　その他

（B～D：週３日以上の常勤者）

(1) Aについて

1．□　単独（　）
2．□　共同（　）
3．□　自営（　）
（カッコ内はスタッフ人数）

（契約または関係先）
(1) □　メーカー
(2) □　流通業者
(3) □　小売業者
(4) □　百貨店
(5) □　学校
(6) □　研究機関
(7) □　その他

(2) Bについて

（勤務先）
1．□　メーカー
2．□　流通業者
3．□　小売業者
4．□　百貨店
5．□　建築設計
6．□　施工業者
7．□　デザイン事務所
8．□　その他

（職務の内容）
a．□　デザイン実務
b．□　営業実務
c．□　デザイン管理職
d．□　一般管理職
e．□　コンサルタント
f．□　その他

(3) Cについて

（勤務先）
1．□　大学（含短大）
2．□　専門学校
3．□　高校
4．□　中学校
5．□　各種学校
6．□　その他

（職　務）
a．□　教授・助教授
b．□　講師（専任）
c．□　教諭・助教諭
d．□　助手・研究員
e．□　大学院
f．□

（担当教科）
(1) □　建築
(2) □　デザイン実技
(3) □　〃　理論
(4) □　技術教養
(5) □　一般〃
(6) □　一般学科

(4) DEについて

1．□　国　立
2．□　公　立
3．□　私　立
4．□　企　業
5．□　その他

(5) DEについて

a．□　管理職
b．□　行政職
c．□　研究員
d．□　助　手
e．□　その他

Fについて

Cに準ずる

(6) Eについて

国
地方
国の外郭団体
地方の外郭団体

職域アンケート調査結果

表2 職域調査区分

1. フリーデザイナー

種別	記号		人数	備考
フリー	A 1	(フリー単独)	18人	
	A 2	(〃 共同)	2人	
	A 3	(〃 自営)	17人	
		(小計)	(37人)	
フリー兼スタッフ	AB		5人	B 1 2人。B 2、B 3・4、B 7 各1人。
フリー兼教育者	A 1 C		6人(1)	大学 5人。各種学校 1人。
〃	A 2 C		5人(1)	〃 3人。専門学校 2人。
〃	A 3 C		17人(5)	〃 10人。 〃 3人。各種学校 4人。
フリー兼教育・研究	A 1 CD		1人	各種学校。
〃	A 3 CD		1人(1)	大学。
		(小計)	(35人)	
		合計	72人	

注、人数欄。カッコ内は教授の数で、その他は講師である。

2. スタッフデザイナー

種別	記号		人数	契約または関係先							
				メーカー	流通業	小売業	百貨店	建設	施工	D事務所	その他
スタッフ	B		82人	23	4	0	29	6	5	13	2
スタッフ兼フリー	BA 1	フリー単独	2 〃				2				
〃	BA 3	フリー自営	1 〃						1		
スタッフ兼フリー・教育者	BA 1 C	フリー単独	1 〃	1							
スタッフ兼教育	BC		5 〃	1			2		1	1	
スタッフ兼教育・研究者	BCD		1 〃					1			
スタッフ兼・研究者	BD		1 〃						1		
		合計	93人	25	4	0	33	7	8	14	2

3. 教育者

種別	記号		人数	内訳					備考
				大学	専門	高校	各種校	不明	
教育者	C		7人(5)	4		2	1		
教育者兼フリー	CA 1	フリー単独	4人(3)	3		1			
〃	CA 2	フリー共同	1 〃	1			兼		
〃	CA 3	フリー自営	1 〃			1	(1)		
〃 スタッフ	CB		2 〃				2		
教育者兼スタッフ・研究	CBD		1 〃				1		
教育者兼研究	CD		9 〃(7)	7	1	1			
〃 行政	CE		1 〃					1	
		合計	26 〃(15)	15	1	5	4(1)	1	

4. 研究者

種別	記号	人数	備考
研究者	D	5人	公立機関 4人、私立機関 1人。
研究者兼教育者	DC	1 〃	国家機関
〃 行政職	DE	2 〃	国家機関 1人、地方機関 1人。
	合計	8人	

5. 行政職

種別	記号	人数	備考
行政職	E	3人	国の外部機関 3人。
行政職兼教育・研究職	ECD	1人	地方機関
	合計	4人	

6. その他(不明) 1人

合計 204人

この調査は，協会としてもまことに重要な調査です。これからの協会の事業に新らしい境地を開拓する上にも，是非とも完備した調査結果を出す必要があると考えますので，正会員，準会員で，未回答の方は“表1”に準じて，アンケートに応じられるようご協力をお願いします。前記のとおり，現在の回答率は56%という，本調査としては，きわめて不満足なものです。

重ねて，よろしくお願いします。

(事務局長 工藤広忠)

職域別懇談会報告

研究委員会・組織委員会

去る9月1日，2日の両日岐阜に於いて職域別懇談会が行われた。開催主旨は，拡大する組織と多様化する会員の相互理解と組織のより効果的活動を見つけ出す事と，これらの動きを通じ協会の体質を変えて行く為のものであった。今回は第1回目でありかつ開催時期が夏であった事等に起因してか参加人員が20名と，予想より少なかったのが残念である。しかし内容は，デザイン論，デザイン教育，デザイン組織のあり方に及び有意義であった。又今後もこの様な機会を継続して持つべきであろう。という意見が大半であった。翌2日は，中部支部の協力で，明治村，日本陶器等の工場を見学した。

第1日目の懇談会は参加人員の都合もあり，当初予定されていた，フリー，教育，研究，スタッフ，の3分科会を，フリー，教育研究，スタッフ，の2分科に分かれ，インテリアデザインの思考，協会の対外活動，内部強化，企業とデザイン等がそれぞれの立場で話し合いが行われた。

■フリー，教育研究分科会

インテリアデザインの思考では，原点を明確にし，拡大領域に対応する必要があるとし，今までの実体は，生産系が主体であったのではないだろうか。これは明治以降続いた生産系主体の「もの」の考え方の影響であり，デザインはもっと，ソフトな分野であり，生活系が主体であるべきではないだろうか。デザイナーは，もっと生活者としての立場を明確にし，そこからものを考えるべきであろう。そして，社会的信頼と責任をはたすべきである。

デザイン教育についても，自分が生活する主体のデザイン教育を行うべきであろう。その為には，協会として，インテリアデザイナーの教育はこうある方が望ましいという様な，カリキュラムを提示する必要があるのではないか，等が話し合われた。

インテリアデザイン，この多様化をどう考えるかという問題については，

interior architect designr
interior product designr
interior decorater

等の職域が考えられるが，これらを，職域分類としてではなく，実際の活動分野別で分科会活動をしていく事等が考えられよう。そしてそれぞれを定義づけるのではなく，参加の角度からの職域を明確にしていくのが望ましいのではないか，等が話し合われた。

プロダクトデザインを主体とした会員より，デザインと生産についての問題提起があり，現状の家具等のデザインの質の低さは，メーカーに対するデザイナーの認識不足もあるのではないだろうか。その事業主体はほとんどが小企業である事を理解する必要があろう。という意見に対して，その小企業から生まれるものも，トータルでは非常に大きく，年間3500億に達するもので，別な見方をすれば，決して小さなものでないだろう。それだけに充分な対策をする必要があろう。

今後の問題として，建築を主体として，インテリアを考えるときであろう。という意見が提示された。

わが協会としての今後の活動については，他の分野との協同を拡大し，個人個人が主体性を持って，インテリアデザイナーとしての共通基盤を作り，インテリアデザインの定義を確立し，広い視野に立っての，体制内革新を計るべきであろう，等が熱心に討議された。

■スタッフ分科会

インテリアデザイン及デザイナーをどう考えるか，という問題の中では，著作権及工業所有権の確立を急ぎ，デザインの保護及びデザイナーの地位の確立を計るべきである。現行ではデザインの著作権は認められておらず，工業所有権についても明確性を欠く所が多い。これらの問題は各自の自覚と，協会としての活動の中から運動を盛り上げ，早急に確立を計るべきであろう。この考え方は，今後ますます組織化して行くであろう。創造組織の中の個人の認め方の問題とも関連しているであろう。デザインをどう認めるか，個人をどう認めるかという共通基準を早く協会内部に確立する必要があるだろうという事等が語られた。

企業とデザインという問題については，この業界のモラルの向上及び個人とスタッフの問題と，デザインと技術開発に対する認識を高める運動を起す等，今後会員の積極的な参加によってつぎのような共通基準を作って行く必要がある，等を中心に語られた。

すなわち，①協会の内部活動や対外活動については，前項の確立の為に，当然必要なことであろうし，協会が会員の保護を真剣に考えるべきであろう。②今までの様に静的な活動ではなく，動的な活動にする為にも，委員や役員の流動化や，コミニティセンターの設置等を行う必要があろう。③社会的な問題としては，健康保険，厚生年金等デザイナーの社会保障を積極的に進めて行く必要があろう。④現在のデザイナーの地位はすべてについて不安定であり，この様な身近かな必要事項を無視すべきではないであろう。⑤事業による，資金の調達等についても，さらに，積極的かつ合理的に行う必要がある，等が討議された。

（秋山修治）

職域別懇談会同行記

職域別懇談会と夏の遠足

— 於岐阜9月1日～2日 —

研究委員会主催による職域別懇談会と協会の遠足を兼ねた集いが去る9月1日と2日にわたって岐阜の長良川のほとりにある阜山荘で開かれた。暦の上では秋とはいえ連日の残暑はことのほかきびしく，名古屋で新幹線をおりて大垣行きの鈍行列車に乗りかえた時には汗が再びどっとふきだしたほどだった。

今回の遠足と集いは中部支部の全面的な厚意と努力により岐阜に決定，懇談会のあとの遠足は犬山市の明治村博物館行きと日本陶器名古屋工場見学である。会場の阜山荘は長良川をのぞむこ高い所にある国民宿舎で，当日は当協会の貸切ということで他の客の姿はなく，中部支部の方達が我々の到着を迎えてくれた。60人位の参加者を見込んで予約した事務局の予想に反して参加者はほぼ3分の1の23人。連絡なしに来なかった人や，直前に参加出来なかった人などがあり，幹事をがっかりさせていたが，ここでも催し物に参加する人の少ない当協会の一面をのぞかせていた。

第一日目の懇談会は理事長の挨拶に始り続いてフリランス・デザイナー及び教育関係者のグループ，スタッフデザイナーのグループの二手に分かれ，それぞれ別室において二時間にわたって話合をもち，そのあと合同して各グループの話合の披露を行った。参加者が少ない割には話合は活溌に行われ，冷房が途中で切れてしまった部屋ではランニング一枚での話合が熱心に続けられた。当日の懇談会の詳細内容は秋山氏の別文を参照していただくことにして，我々は夕食前にひと風呂あびることにする。

この懇談会が午後2時から5時半まで行われるため，せっかく長良川べりに居りながらシーズンたけなわの鵜飼を楽しむことが出来なかったのは，残念なことであった。鵜飼の船は4時には全部出てしまうのである。それでも夕食は鮎料理づくしであった。

宴のなかほど，中村圭介氏の発案で自己紹介と女房自慢をということになり，それぞれのなれそめなどを酒の勢もかりてなごやかに披露された。

宴が終ったころには長良川に浮んでいた屋形船もすっかり姿を消していたが，むし暑い岐阜の夜に涼を求めて参加者は，三々五々と河原におりていった。長良川は町の中を流れる川としては水量も多く，澄んでいて流れも相当早そうだった。話によると，対岸に泳いで渡れないほどの流れで，毎年試みる人の何人かはおぼれ死にするという。足許の小石をひろっては水切を楽しむ会員は少年時代の腕前をきそって童心にかえっていた。

翌朝8時30分，大型バスにチラホラ座席をしめ，明治村へ出発，新米のバスガイドが時々とちりながら沿道の説明をするのだが，乗客と対面で説明をするので左と右がごっちゃになり，右が，左がと言いちがえているのがいかにも新米ぽくて，おかしかった。

岐阜市から約1時間半の所にある犬山市の郊外，入鹿池のほとりに博物館明治村が誕生したのは7年前だと説明書に書いてあった。敷地100万平方メートルに及ぶこの野外博物館には，日本の各地から集められ，再建築された約50点近くの明治の建物がある。

村の中にはかって京都市内をはしっていた市電が見学者を乗せ，のんびりはしっている。ここに集められたものはすべて単体としての建築物だけで，町ぐるみとか，町内そっくり移設したというものではないので，たとえ苦心して商業建築だけを隣接して建ててみても，そこに当時の町並が再現されるわけではない。欲をいわせてもらえば，一つ一つの建物は平凡なものでも，ある時代の町並をそっくり移設することは出来ないものだろうかなどと話しながらみてまわった。デンマークには漁村をそっくり再現した公園があり，本物のイカの干物がほしてあると聞いた。

いくつかみた建物の中で，菅島灯台付属官舎の美しい煉瓦とシックイの白い柱のコントラス，第四高等学校武術道場の端正な木造建築など，特に印象に残った。3時には名古屋市内にある日本陶器を見学する予定になっているので明治村では昼食をとる間もなく建物をみてあるき，バスにパンを買いこんでのひるごはんをとるといういそがしさだった。明治村は東京から日帰り出来るハイキングコースと思われる。空気もいいし，人も少ない。家族ずれで手弁当で一度こられてはいかが？

次の訪問先日本陶器へ到着。さっそく会議室へとうされて陶器の出来るまでのＰＲ映画をみせられる。次いでパンフレットを片手に室温30°の工場に入る。折からの残暑でひどくむし暑かったので工場内はさぞやと思いの外，湿度が非常に低いとかでほとんど汗が出ない。ベルトコンベヤーの両側に女子工員がならび手なれた様子で製品を加工している。工場内で作業をしているのはほとんどが女子である。検査にもれた陶器はそばにある大きな木箱に思いきりたたきつけられ，おしげもなくこわされる。工場を一巡すること約30分，絵付をされ，こん包された陶器が倉庫に山積されているのをみながら工場を出た。

（会報委員　加藤帛子記）

次回は，いろいろと企画しておりますので，是非とも，会員各位の御参加を期待しております。

（組織委員会）

かるてっと

新企画「わたしのＰＲ」

この「らん」は，今まで会員同志のコミュニケーションとして，お互いの横顔すらも知りえない情況を考え，気軽に話しかけられる「らん」といたしました。

たとえば，

みんなで釣りに行きましょう。

ゴルフの大会を開きましょう。

体力増進のハイキングはどうか。

みんなで，ボウリングはどうか。

こんなことが協会企画として進めるようなムードをつくりたいものです。

協会は，一部の人達のためにだけあるのではなく，たがいの意見交換や研究心またあそびなどと巾広い生活のためへと一助としてゆきたいものです。

会員の皆様には，ある日突然に，郵便にてお願い致しますが，気軽に話しかけるつもりでしたためて下さい。

是非，楽しいページにしてゆきたいものです。

（会報委員会記）

森　谷　延　周

昔の府立工芸，現在の都立工芸高校を卒業してはや10数年。スタートは百貨店で売場・外商・設計の仕事にたずさわっていた。店内で顧客に直接接した体験，手さぐりながらの外歩き，デザインセクションに移り原好輝氏を中心に毎日欠かすことなくデザインの話に花を咲かせていた。日常の仕事である家具・インテリアデザインの在り方に加えて，建築・グラフイック・ＩＤの分野まで話はいつも尽きなかった。

その頃向学心に燃えていた？　私は桑沢デザイン研究所の夜学に２年程通う。いま考えると勉学に励む時間より，悪友と杯を重ねていた時間の方が多かったようだ。桑沢では浜口隆一氏より，デザイナーたる者，社会をリードしてゆく豊かな創造力と正しい説得力が必要と伺ったことを記憶している。その后百貨店生活の中で一つの壁にぶつかり，スタッフと論議を重ねた結果ここに区切をつけて飛び出す。何かにつけて腐っていた私であったが豊口克平氏より「どうだ，来てやってみないか」と言われ，豊口デザイン研究所での仕事が初まった。いままでの家具・インテリアの仕事に加えてデイスプレイの仕事を体験する。一口に言えば＜良い仕事をする＞というのが研究所のポリシーであった。コツコツと進めてゆくプロダクトの仕事，比較的タイムリミットのはっきりしたインテリア・デイスプレイの仕事。デザインという仕事の中で自己の理論・自己の思想も大切だが，実際の仕事の中でその必要性と価値性とのかかわりあいを考え，創り出してゆくことは大変にきびしい。

数年前豊口デザイン研究所を退所しフリーとなる。現在は建築畑の人と共同の仕事場を持つかたわら，当協会会員も多く参画しているインテリアセンタースクールの仕事を加えての日々である。人に教えるということは仲々むづかしいと良く聞くが，私はそんな柄ではないし，逆に教えられることの方が多く，またそこに興味を持っている。そして今現在私が一番望んでいることは二つ，一つはほかのデザインジャンルの人々との連帯と協同ワーク，もう一つは優れた生産技術を持つ理解あるメーカーとのタイアップである。

（１頁よりつづく）

人間は惰性に流れることは誰にでもあることであり，何とはなくヌルマ湯につかっていることが気にならずに過してしまうことである。特に，その体勢に入ってしまえば外部よりの指摘がない限り気がつかないことが多いものである。現在の協会の理事会がそうであるということではなく，ヤングが現状のままではリードすることもなく，なんということもなく，活気のない協会として先細りしてしまうことを懸念するのは私一人ではないと思う。

日本ビクター社見学会開かる

10月14日（土）。日本ビクター社の音響研究所と大和工場のキヤビネット，レコード製作部門の見学，ビクター社のスタッフ・デザイナーとの懇談会を開催。

秋晴れの午后，中部，関西支部よりの参加もあり，45名位参加。

・壁板反射板が電動式で上下移動するスタジオ実験室・部屋６面全体を吸音クオビでおおわれた，東洋一の無響音室・４チヤンネル，ステレオを壁面ユニット化したリビングルームなどの見学の後，スタッフ・デザイナーと懇談会を開き，質問や提案を交換。

近年，ホテル，レストラン，住宅などのインテリアに音響装置は欠かせないものになり，また，ステレオの２チヤンネルから４チヤンネルへと技術の進歩にともない，それに対応するインテリア空間の設計に今回の見学会は大いに参考になった。

スタジオ実験室できいた４チヤンネルのゴッドファーザーなど迫力ある音響空間を演出していました。

（会報委員　高田紀久枝記）

海外レポート

グループ 21

榎田　均

既に御存知の方も多いと思いますがヨーロッパに於て，企業のデザイン啓蒙運動として活躍している「グループ21」について紹介してみます。

このグループはヨーロッパで生活用具を生産し販売している企業の中から，自から高品質で且つ明日をひらく為に有効な商品にデザインを通じて共に努力し合おう，と頭初21社が集まり活動を始めたことから「グループ 21」と名づけられたものです。

しかし，このグループメンバーは今では24社に増えています。

（社名リスト及びその商標）
（1970年現在）

（社名）　　（国名）

Arabia, Finnland（フインランド）
Boda Bruks AB, Schweden（スウェーデン）
Braun AG, Deutschland（西独）
Dansk Designs Ltd., Dänemark（デンマーク）
Daum & Cie., Frankreich（フランス）
Finel, Finnland（フインランド）
Finntex/Tampella, Finnland（フインランド）
Gralgas GmbH, Deutschland（西独）
Gustavsbergs Fabriker AB, Schweden（スウェーデン）
Oy Hackman AB, Finnland（フインランド）
iittala, Finnland（フインランド）
Kosta AB, Schweden（スウェーデン）
Neuzeughammer AmboBwerk KG, Österreich（オーストリー）
Notsjoe Glass, Finnland（フインランド）
Orrefors AB, Schweden（スウェーデン）
Pott, Deutschland（西独）
Riedel, Tiroler Glasütte KG, Österreich（オーストリー）
AB Rorstrands Porslinsfabriker, Schweden（スウェーデン）
Rosenthal Glas- und Porzellan AG, Deutschland（西独）
Royal Leerdam, Niederlande（オランダ）
Staff & Schwarz GmbH, Deutschland（西独）
Thomas Glas- und Porzellan AG, Deutschland（西独）
venini, Italien（イタリー）
Ed. Wüsthof Dreizackwerk Solingen, Deutschland（西独）

会員リストを見ればヨーロッパの高級品を作っている一流メーカー，アラビア製陶，電気製品のブラウン，フインランドのイッタラ硝子社，オーストリーのマンボス製作所，陶磁器ガラスのローゼンタール社など目下ヨーロッパ市場を背負っている様な優秀企業が並んでいます。

グループ 21 のパンフレットによれば**その会員構成は**，各種食卓用品，陶磁器，ガラス製品，洋食器，繊維製品を生産する全ヨーロッパの進歩的なグループにより結成されているとうたわれています。

その目的は

構成メンバーの共通目標は，日常生活用品をデザインを通じ，形や，機能性や，品質表示を更に高からしめ且つそれらの商品を販売して行くことにある，とされています。

次に内容としてどんな事業をしているかについて，1970年（約２年前）にヨーロッパ内のデザイン懸賞募集を行なったのを例に進めてみましょう。

その題名は「Tisch 80」といって，Tisch は英語のテーブル，80は1980年代を指すのですが要は10年先をも考慮に入れた，テーブルに代表される関連商品についてのコンペティションに相当するわけです。

主　旨

これからの新しい飲食様式の創造と同時にあすの食卓用品の具体的な生産への関心を換起するため，グループ 21 が広くヨーロッパ，特に若い世代のデザイナーを対象に呼びかけ，前に目的の項で述べたように，「グループ 21」の各企業が今後10年間を想定した夫々の研究活動に活用出来る新鮮なアイデアを求めるために行なわれたものです。

現在これらグループ企業内に共通する課題として，日毎に改進されつつある技術の発展を，目下取扱っている商品に適応させ且つ，明日の生活，食生活用具のあり方と若い人達の環境に対する適応性，消費者の生活習慣などをこれらの商品にどの様に対応させて行くか，そして常に魅力ある商品を積極的に市場に提供して行かなければならない点であります。

コンペの組織

“テイッシュ 80”はグループ 21 が出資し，ＩＣＳＩＤ（国際インダストリアルデザイン団体協議会）の後援を得，公証人として弁護士，Hans H. Voges 氏立ち合いのもとに行なわれた。

審査委員としては

Rodolfo Bonetto
ボネットデザイン事務所
（イタリー）

Dr. Vera Horvat-Pintaric
美術史大学教授
（ユーゴースラビア）

Lord Queensberry
ロイヤルカレッヂオブアート教授
（英　国）

Walter Schaer
ハンブルグ造型美術専門学校教授
（西　独）

の４氏によって行なわれた。

作品の評価

本コンペティションで極めて興味ある点の一つとして作品の評価方法が明示されていることであります。

即ち，先ず応募作品を大きく，次の三つのグループに分類し，

1. 計画及びシステムの優先される作品グループ
2. セットものグループ
3. 単品ものグループ

この3グループを次表の様な点数によって評価採点する方法です。

評価の立場＼区別	(1) 計画及びシステム	(2) セットもの	(3) 単品もの
アイデイア	5	2	2
社会的経済的価値	5	5	5
製作技術	4	5	5
美的水準	2	4	4
生産の可能性	2	3	3

(1)のシステム優先作品とは，給食の為の施設とか用具，ランチボックスなど省力化や暖かく且つコンパクトな給食が出来る様な道具などで，当然採点基準としてもアイデイアや社会的価値がカッコよさや，直ぐ商品になるかどうかなどの観点よりも優先される部類の作品です。

(2)，(3)は逆に作る上で無難な事や，美しい形，商品化の可能性などが重視されて評価されています。

また，共通して高く評価されているのは社会的，経済的価値でありこの点欧州の先進企業ばかりのグループだけにただ，自分の企業だけという狭い考えでなしに社会性という面が最優先されている点などもうらやましい限りであります。

審査の結果

次に受賞内容についてみてみると，賞金総額7万5千マルクは21段階の夫々の受賞者に配分された。

1等　A　2万1千マルク
　　B　2万1千マルク
（1等相当が2つ現われ優劣つけがたい為2本となった。）
2等　9千マルク
3等　7　〃
4～6等　5　〃
7～14等　2　〃
15～21等　1　〃

受賞人数は，チームで応募している者もあり計34名で発表された。その内訳は，ドイツ，デンマーク，フインランド，英国，イタリー，オランダ，スイスの各国の人々で，その平均年令は28才の人々であった。

審査委員会の講評

審査委員会として，一般的に言える点は，“計画及びシステム”のグループに最もオリジナリティーに富んだ作品が多かった点で，これらは将来，グループ内各企業の研究方向にも大きな可能性を示唆していると評価しています。しかし今回この作品グループの中には国際的な注目を得る程の作品は発見出来ず1位を獲得出来なかった。

また，全般を通して今回のコンペティションは，多くのデザイナーに刺戟を与える役割は数多く応募された作品を見ても充分果し得たと述べ，且つグループ21も今后，その文化的，経済的目的を果たす意味においてもコンペティションの継続を要望しています。但し次回からのプログラムは，内容，範囲，基準などを一層明確にして実施すべきであると注意を与えています。

そもそもデザイン計画，システム・デザインの概念は最近話題になって来た傾向で，建築界，室内装飾，家具の分野で顕著な取組が見られる程度で，ヨーロッパ内特にグループ21の企業内に於ても今後大いに認識し研究開発の方向性としての示唆に富む点を審査委員会は強調しています。

唯，単なる経済的可能性の追求にとどまらず，「人間と環境の関係」についての推移を予期して努力して行くべきだと結んでいます。

受賞作品の紹介

今回の受賞者の中にはイタリーから応募はしていますが日本人デザイナーとして蓮池まきお氏がランチ用食器で受賞していますが，発想も日本のオカモジ当りを連想させる日本的な作品です。

もう一人は，佐久間義孝氏で食卓用調味料セットで，ユニークな作品です。この作品はメーカーにより生産ルートに乗り，私はドイツ市場で購入し産デ振の海外収集見本の中に加わっています。いづれもこの両氏は目下イタリーのデザイン事務所で活躍している人々で国際的に日本デザイン界の力を端的に高からしめている人として頼母しい限りです。

●本コンペティションの概要●

参加国	26ヶ国
応募件数	262件
受賞作品	21点

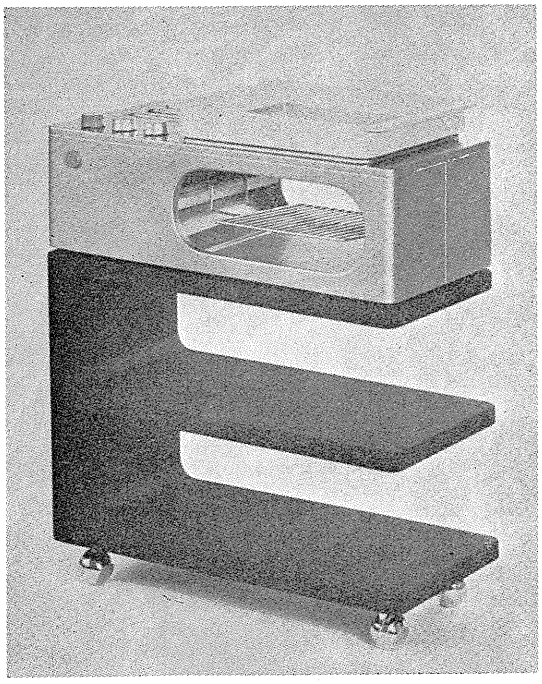
以上

グループ 21

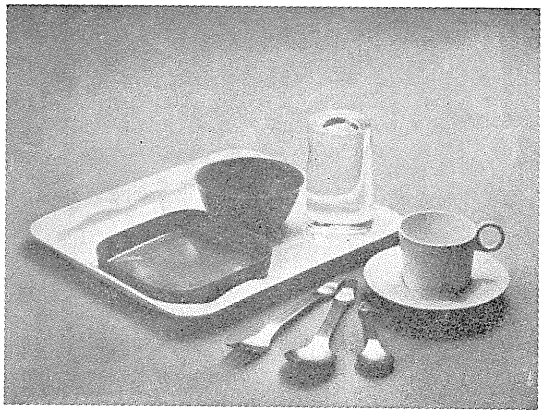
入賞作品より

3 等 ●パーティー盆
デザイン ERNST-OTTO LOEWE（西独）
（この作品は生産化され市販されている）

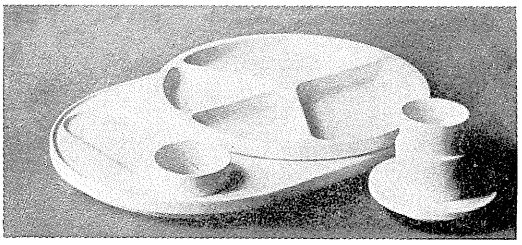
8 等 ●ロースターイササービスワゴン
デザイン HANS R. JANSSEN（西独）

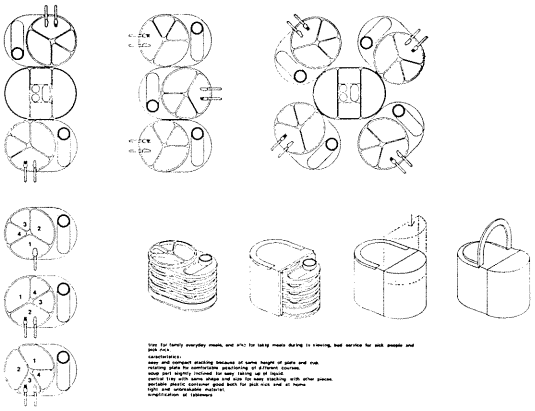


13 等 ●ランチセット
デザイン HEINZ ECK（西独）
（底に波型のすべり止めがある）

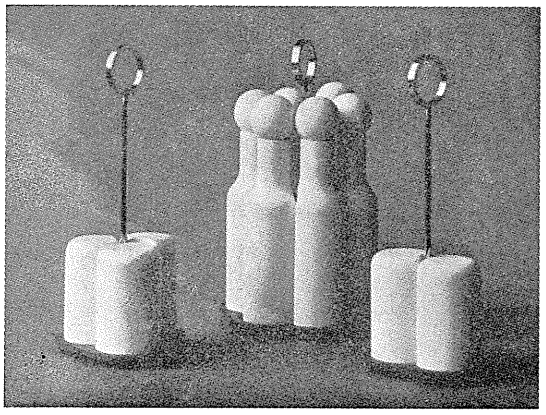


14 等 ●ランチ用食器
デザイン MAKIO HASUIKE（日本）





17 等 ●食卓用調味料セット
デザイン YOSHITAKA SAKUMA（日本）



賛助会員紹介

朝日木工株式会社　豊川工場
愛知県豊川市豊川町幾通り15
豊川（05338）6—4171

株式会社　コスガ
東京都中央区東日本橋2—15—4
東京（03）862—6711

株式会社　天童木工東京支店
東京都港区芝浜松町2—11
東京（03）432—0401

飛騨産業株式会社
岐阜県高山市名田町1—82
高山（0577）32—1001

富士ファニチァ株式会社大阪支店
大阪市福島区上福島北2—89 淀川ビル3F
大阪（06）531—9740

三好木工株式会社
東京都文京区湯島4—9—2
東京（03）813—5481

愛知株式会社
名古屋市東区赤萩町3—8
名古屋（052）941—6226

株式会社　寿商店
東京都千代田区有楽町1—14
東京（03）591—1311

チトセ株式会社
東大阪市玉串町東2—1—1
東大阪（0729）62—1141

ネコス工業株式会社
横浜市戸塚区飯島町久保890—1
横浜（045）851—5761

古川工業株式会社
大阪市大淀区中津浜通4—5
大阪（06）371—0849

株式会社　ホウトク
名古屋市中区錦2—15　協銀ビル
名古屋（052）201—4101

フランスベッド株式会社
東京都昭島市中神町1148
昭島（0425）43—3111

株式会社オリエンタル中村百貨店
名古屋市中区栄3—5—1
名古屋（052）251—2111

株式会社　大丸装工部
大阪市南区鰻谷中ノ町38
大阪（06）252—0641

株式会社　高島屋
大阪市南区難波新地6—14
大阪（06）631—1101

株式会社高島屋東京支店設計部
東京都中央区日本橋通2—5
東京（03）211—4111 内2157

株式会社　ニック（NIC）
福岡市中央区天神1—11—17　福岡ビル
福岡（092）77—2234

株式会社ハヤミズ家具センター
東京都台東区下谷2—7—2
東京（03）876—1111

国際インテリア株式会社
東京都豊島区南池袋1—18—21
東京（03）983—9151

株式会社　モダンファニチャーセールス
東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル
東京（03）211—8351

日本総業株式会社（エアボン）
東京都港区麻布飯倉片町10
東京（03）582—3341

クラレ・インテリヤ株式会社
東京都港区六本木5—2—1
東京（03）403—9721(代)

株式会社　ホクサン
東京都江東区木場3—15—4
東京（03）641—5111

株式会社　木利屋
東京都港区新橋3—6—7
東京（03）503—1920

株式会社　商園
東京都渋谷区東1—26—26 富士ビル8F
東京（03）407—8171

有限会社　フカツ商店
静岡県静岡市中島390
静岡（0542）82—3681

株式会社　小川商店
東京都渋谷区松涛2—18—2
東京（03）460—5771

株式会社　川島織物東京営業所
東京都千代田区永田町2—14—2
山王グランドビル5F
東京（03）580—4511

切り取り線

協会に皆様の声を！

会員諸兄姉と協会を結ぶ定期便の会報に，協会並びに会報委員会宛の葉書を，毎号付帯させることにしました。皆様の生の声を，手軽に書きとめて協会へお送り下さい。会報へのご意見のみならず協会への希望，連絡事項などにご利用下さい。なお，当分の間，投函の際は10円切手をはって下さい。

（会報委員会記）

切り取り線

郵便はがき

□□□□-□□

東京都渋谷区神宮前一丁目十四ノ三十四
森ビル
社団法人 日本インテリアデザイナー協会
会報委員会行

10円切手をおはり下さい

機関誌・JID Vol.13 No.58 定価 200円
昭和47年11月発行 印刷 広洋印刷(株)
発行所 社団法人 日本インテリアデザイナー協会
(〒150) 東京都渋谷区神宮前1—14—34 森ビル
振替・東京・76389番 電話（03）403—6647
The Japan Interior Designers Association
Mori-Bldg., 14-34, 1-chome, Jingumae
Shibuya-ku, Tokyo, Japan.

発行人・白石勝彦 編集 社団法人 日本インテリアデザイナー協会 会報委員会
担当理事（関東）川上信二　担当理事（関西）川崎 浩
委員長(関東)尾上孝一●三宅征郎・織田武己・泉 修二
●加藤角子・高田紀久枝・山岸征史
(関西)本田安治●柏原秀夫
(中部)林 寅正●八代美智子・若園 晃・宇賀敏夫・安藤 清

住江織物株式会社東京支店
東京都港区西新橋3—23—1
東京（03）433—4171

トーソー株式会社大阪支店
大阪市城東区古市南通3—20
大阪（06）939—5721

東洋紡インテリア株式会社
大阪市北区梅ヶ枝町108
大阪（06）361—6771

長谷虎紡績株式会社
大阪市東区横堀2—10
大阪（06）203—5921

藤井毛織株式会社東京事務所
東京都中央区日本橋堀留町2—3
東京（03）663—6631

内一商事株式会社東京営業所
東京都荒川区東日暮里6—36—12
東京（03）802—4471

株式会社　サンゲツ
名古屋市西区小舟町2丁目14
名古屋（052）565—1133

アイカ工業株式会社
愛知県西春日井郡新川町西堀江2288
新川清洲（0560）40—5311

東洋ゴム工業株式会社
大阪市西区江戸堀上通2—5
大阪（06）441—3580・8801

富国株式会社
東京都中央区日本橋小伝馬町2—2
東京（03）662—1901

揖斐川電気工業株式会社建材事業部
岐阜県大垣市神田町2—1
大垣（0584）81—3111　内線368

株式会社　トップトーン
東京都葛飾区東四つ木3—44—15
東京（03）692—9097(代)

株式会社　佐野紙芸インテリア事業部
京都府亀岡市曽我部町犬飼馬の上1
亀岡（07712）3—0661～4

佐治タイル株式会社
名古屋市北区山田西町3—106
名古屋（052）981—9531

東濃陶器株式会社
岐阜県土岐市駄知町1435
土岐（05725）9—3131

株式会社　アイ・エム・エス
東京都港区南青山4—21—27
東京（03）402—1855

株式会社　日建設計
大阪市東区横堀2—38
大阪（06）203—2361

株式会社　カフアドハウス
東京都港区西麻布2—13—12　早野ビル
東京（03）407—2428

株式会社　竹中工務店東京支店
東京都千代田区神田錦町1—9
東京（03）294—2111

株式会社　ファースト東京支社
東京都港区赤坂4—1—32　赤坂ビル6F
東京（03）585—2046

株式会社　東光堂書店
東京都中央区日本橋通1—5　中内ビル
東京（03）272—1966

日本電気装備株式会社
大阪府東大阪市花園西町1—14—11
東大阪（0729）61—6321

松下電工株式会社
大阪府門真市大字門真1048
大阪（06）908—1131

ヤマギワ電気株式会社
東京都千代田区外神田4—1—1
東京（03）253—2111(大代)

ヤマギワ電気株式会社　各古屋支店
名古屋市中区新栄町6—9
名古屋（052）931—2111

共同通信工業株式会社
東京都千代田区内神田1—17—11
東京（03）292—7671

新　加　入

株式会社　カワキチ
東京都新宿区西大久保2—223
東京（03）209—7001

株式会社　セミカインテリア
東京都豊島区南池袋1—18—21
東京（03）984—2211

住友スリーエム株式会社
東京都港区赤坂7—1—21
東京（03）403—1111

（順序は業種別によった）

切り取り線

(1) 会報へのご意見

(2) 協会への連絡

(3) その他・何でも

（紙面不足の折には別便にてどうぞ）

編　集　後　記

■編集事務も女性２人先に席をたち，男性３人もの云わず，何か追われる様な一刻，事務局の秋の夜，何かもの寂しさを感じる。これから暮にかけてはお互いに特に忙しい毎日，健康に気をつけて働かねばと自覚すれど，なんとはなく飲みたくなる心境にさそわれ飲み過ぎる，いつも反省する候となる。　（山岸）

■情報社会とはいわれながら，いつになく情報らしきがみえず，編集の方もままならず。秋の運動会も終わり，文化の秋も叫ばれる今日この頃。パンダもくる動物園に新しいニュースもまたこれでふえるか。イタリヤのニュースもまた多く。乞御期待。
（尾上）

切り取り線